大学教育改革と都市

小松原　　尚

Ⅰ　都市と大学との関係
Ⅱ　自治体との連携による大学教育
　１．都市である御所市の課題
　２．地域志向教育と御所市の位置づけ
　３．大学生の学習成果と御所市への貢献
Ⅲ　都市における地（知）の拠点事業の意義

Ⅰ　都市と大学との関係

大学の存在が都市の生成・発展と密接不可分であることは、これまでも様々な視角・視点から論じられてきたところである。中世のヨーロッパの都市の形成過程において大学の果たした役割は少なくない。中世を起源とする都市は大学の存在を抜きには語れないものが少なくないとの指摘がある（横尾：1992，関口：1997）。また、わが国の近代都市にあっても、その都市景観と大学とのかかわりは無視できない（関口：1998）。

さて、工場等の大都市圏への立地規制の大学への適用も継続していた、1980年代後半のわが国にあって、特に大都市圏外の都市において、公設民営方式による大学設立が活発であった。尚、この時期における地方圏における大学設立の推移、背景そしてその展望に関しては、加藤和暢（1988）に詳述されている。大学はそうした都市にとっては、知名度の向上や学生の増加による地域活性化につながると期待されたのである。この点に関しては、下平尾勲（1995）が産業構造の変化の中での地方圏の活性化と大学の立地について論じている。さらに、国土庁大都市圏整備局より大学の地方分散を対象とした調査報告が公刊され、その中で、人口規模の比較的小さい都市において大学等の立地に対する期待や効果が高い傾向が指摘されている（国土庁大都市圏整備局編,1995：63）。

わが国のように、大都市圏への人口や諸機能の集中・集積が高まれば高まるほど、教育サービスへのニーズも多様化し、大学にあってはより質的に高度なサービスを求められるようになる。1990年代以降、このようなサービス生産の向都現象を肯定的にとらえ、都心への大学の立地制限が緩和されたのである。

すなわち、「文部省は東京、大阪、名古屋などの大都市で大学の新増設を抑えてきた大学立地抑制策の見直しに向け検討を始めた。……国土庁との間で非公式に意見交換を始めたほか、大学審議会の部会で地域配置問題の一環として議論する。……大学設置の抑制策は、まず国土庁所管の通称『工業（場）等規制法』による。……文部省が大学設置に関する内規で、70年代以降、大都市での大学新増設を抑制してきたため、事実上、大都市で大学の新増設はできなくなっていた。文部省の狙いは大学の地方分散を進め、高等教育の地域間格差を是正することにあった。……一方で大学には生涯学習や社会人向けの教育の充実を図るという新たな機能が期待されるようになり、都市部の大学を充実させる必要も出てきた」（『日本経済新聞』1996年１月５日付）のである。

尚、都市の立地環境の変化と大学の対応に関しては小松原（2005）も併せて参照されたい。

Ⅱ　自治体との連携による大学教育

１．都市である御所市の課題

御所市では2011年9月に第五次の総合計画を策定している（御所市企画開発部企画観光課,2011）。この総合計画によると、御所市は大阪市内とは鉄道で40分、京都市とも1時間20分でアクセス可能である。さらに、高速自動車網の整備の進展により、近畿圏一円にわたって自動車交通の利便性向上の恩恵に浴することが可能な環境になっている。この点に鑑みると御所市は関西における大都市圏の一部を構成していると考えられる。

こうした利便性を念頭に、関西大都市圏内における住宅機能地域として御所市を位置づけ、市街化区域内農地の宅地への転用を図り、近郊住宅団地の形成を企図した。しかし、当初の予想通りには進まず、大規模な住宅開発は

行われなかった。

そして四次計画以降、今次計画に至る10年間に定住人口は大幅に減少し、３万人近くまで落ち込んだ。その要因としては、少子高齢化に伴う人口の自然減少と他地域への転出による社会減少の両側面がある。そこで市では、定住人口の減少を抑制するとともに交流人口の増加を目指すべく、「訪れたい」「住みたい」と思われるようなまちづくりを志向している。

そうした施策の一つが「観光立市・御所」の試みなのである。御所市には、自然観光資源として、金剛山や葛城山があり、人文観光資源として葛城氏や巨勢氏に縁の遺跡、さらに中心市街地周辺には中世の町並みが残っており、神社仏閣など、文化財も数多い。また、ゴム製品製造や繊維工業の技術を生かした地場産業、さらに製薬業など製造業は顕在であり、産業観光の素材も多様である。

生産物の商品としての付加価値を高め、新しい需要を掘り起こすためには、産地としての御所の魅力を消費者に印象付けることが重要になる。このような背景もあって、これまで以上に観光振興に関心が高まってきた。これから一層、御所市の魅力を高めるために地域資源の掘り起しや有効な利活用に向け推進することが不可欠になった。

小松原（2007；127）が指摘したように、大都市へ人口集中が深化し、その結果として過密に伴う住環境の劣化は自然への関心の高まりを引き起こしている。交通インフラの整備とモータリゼーションの進展によって日帰り観光圏は大きく拡大した。このことは旧来遠隔地とされてきた山間地域も都市の観光・レクリエーション機能を担い、都市圏の一部を構成する可能性を示しているとも考えられる。

その点において、大都市縁辺部に位置する御所市も、観光サービスにおいて新たな産地間競争の中に入ることになる。したがって、単に自然観光資源が存在するだけでは不十分である。都市生活者を引き付けるためのそこでしか得られない仕掛けや魅力が必要となる。より高次のサービスの質を都市生活者は求める。山間地域との競争にあって、自然や歴史を都市的需要にどのように適応させていくかは大きな課題である。

今後、観光・レクリエーションの形態にあっても少量他品目化が一段と進むと考えられる。このような段階にあって、需要の取込みにあたっては個別地点の対応だけでなく、周辺観光地との連繋が不可欠である。サービス集積を念頭に置いた戦略的な交通網の活用を考える必要がある。

２．地域志向教育と御所市の位置づけ

地域志向教育とは日常の講義、すなわち座学で学んだことを大学の外で学生自らが実際に確認する教育である。同時に、学生が訪れた地域において、その活動がそこで生活する人々にとっても暮らしつづけるための刺激となるものである。そして、学生自身も自らの活動が社会化されることに気付く学習活動の一環でもある。

大学における入学時より卒業に至るまでの一連の学修においてそれを実行するためには学外での学習環境提供の場が必要となる。その観点から地域と大学との結びつきは、不可欠である。本論で取り上げている御所市とは筆者の所属する大学との間で包括連携協定を締結しており、恒常的に両者間の協力関係を構築している。以下に本稿の内容との関連するものを具体的に示しておく。

2010年6月に、御所市のまちづくりにかかわるNPO法人の役員の方から、中心市街地の歴史的まちなみに関する調査活動へのお手伝いの依頼を受けた。そして、活動内容を煮詰めていく中で、調査活動への学生参加の可能性と方法に関して検討することになった。こうした試みは学生にとっては地域の方々との交流を通して、講義では得られない実体験に基づく学習活動となる。

調査実施日を11月28日と定めて、この活動に関心を抱きそうな学生へも積極的に働きかけた。その結果、最初の説明会（10月15日）には10名弱の参加を得た。この説明会で参加の意思表示をされた学生諸君と共に調査チームを編成して課題に取組むことにした。２回の学内での検討会（10月15日、11月19日）にはNPOの担当の方が必ずご出席下さり、必要かつ十分な情報提供を賜った。これらは、学生諸君が調査対象地に対する認識を高める上で大いに役立った。

11月28日の調査当日、調査活動とその後の集計作業も終えられた。御所に

暮らす方々とチームを組んで、ご案内をいただき、「まちなみ」への思いをうかがいながらの調査活動は、日常の大学生活では得難い数多くのインパクトがあった。

2012年7月になってNPOの方からの連絡で、申請していた「町家等地域資源発掘･発信事業」の補助事業計画に対して、奈良県より補助金が付いたとのことであった。今回の補助事業は、大学とまちづくり団体･奈良県の協働･古民家活用・地域コミュニティーとNPOの活動による情報発信が主になり、われわれ教員と学生諸君はこの「活動のコーディネーター」をとの依頼であった。

8月に入り、NPOの皆さんによる意識調査や活動を進めるため、われわれ奈良県立大学の学生有志と話合い、お手伝いの可能性を探るための打合せに参加した。そして、アンケート調査の実施のために、10月27日（土）13時より御所市にて打合せ会議を始めた。そこで確認した項目を踏まえて、試行調査を実施し、その結果を踏まえて、聴き取り事項などの加除修正の検討をおこなった。最後に今回の調査を行ってみての情報共有化と活動内容の改善点を話し合った。

この試行調査に参加した学生の報告の中では、インタビュー調査の結果からわかったこととして、「建築年代、建築方式などのご自宅・町家に関する詳しい知識をもっている住民の方もおられたること」に感心していた。例えば、「木材はすべてケヤキの木を使用しており、釘を使わずに組み合わせによって建てられたものであること」や、「重厚建築のため地震のとき横揺れは激しいが、家屋の物が落下したり、壊れたりしたことはない」ということに興味深かったことが記されていた。

また、NPOの方からは、御所が持つ古民家を活かして活気あふれる多くの人が訪れる町にしたいことや、町家、古民家を活用した伝統的・文化的なまちづくりへの意欲が語られた。

11月11日、いよいよ本調査である。この日は御所市のメインイベントの一つである「霜月祭」の日でもあり、NPOの皆さんは祭の方に集中せざるを得ず、学生を中心とした調査活動となった。学生たちにとっては、直接まち

やにお住いの方々よりお話しを伺う機会を得て、大いに勉強になった。この調査で、学生たちは、御所まちの町家を、より深く理解し、改めて我々の故郷の素晴らしさを再認識する機会ともなった。尚、12月1日には追加調査も実施した。

年末から年始にかけて、アンケート調査結果の集計と分析に取り掛かった。そして、2013年2月16日（土）には町屋等地域資源発掘・発信事業に基づき、2012年度に学生が実施した調査・研究活動の成果を報告し、そのでの議論を踏まえて報告書も作成した。NPOの皆さんとわれわれとの共働の成果である。

ここで得られた経験は大学における教育研究活動に活用できているので、この試みは１つの大きな成果を得られたことになる。もう一方で、学生が得た知見を地域の皆様に検証していただいたことも彼らにとって、大学における一連の学修の進化にとって重要であった。

２．大学生の学習成果と御所市への貢献

（１）観光調査の地域志向教育への活用

観光、中でも地旅は、「地域」を誇りに感じている人たちが、そこを楽しみに来てくれる人たちのために、企画しておもてなしする旅のこと（(一社)全国旅行業協会が事務委託した「(株）全旅」が、地旅認定要件による）であり、地旅を担う外郭団体等・行政や民間事業者からの聞き取りを通して、経済地理学や地域構造論の講義で学んだことが、実際にどのように観光として活用されているかを直接聞くことで確かめられる絶好の機会である。したがって、地域志向教育研究として着目している産業観光の学習に有効だと考えられる。

本調査は、学生が近畿圏の観光ツアーの状況について旅行会社を訪ねて調査することにもなる。しかも、産業観光に止まらず、それぞれの市町村に広く存在する文物も対象とした。なぜなら、そこで暮らす人々にとってはありきたりのものであっても、地域の外からみるとそこでしか見ることのできない貴重なものが存在し、それは産業遺産に限定されるものではないと考えられるからである。そしてそれらを住民自らが認識し観光サービスの生産につなげる様子を調査活動によって学生が気づくことが可能かどうかを確かめる

ことも可能である。

これまで述べた観点より「地旅博覧会in和歌山」を調査対象に選んだ。このイベントは、全国の着地型観光関係者が集まることから、地域資源を活用した観光の情報を生で聞ける有効な機会といえる。そのために、「観光立市“御所”を目指す会バスツアー」（協力：株式会社サンキュー観光）に参加して、地旅博覧会の出展者を対象にしたヒアリング調査を実施した。

全国から着地型観光に携わる専門家が終結した地旅博覧会（地旅とは、着地型観光でも厳選されたものを指す）において、ヒアリング調査を行なった。その方法は、2014年2月11日開催の第12回国内観光活性化フォーラム・地旅博覧会in和歌山に参加した全国の約120の団体のうち、物販を除き調査にご協力していただいた39団体（行政･外郭団体関連35件、民間4団体）を対象に、奈良県立大学地域創造学科小松原ゼミの学生12名が、2人1組になり、ヒアリング調査を行った。尚、奈良県立大学は御所市と包括連携協定を締結している関係にある。調査の概要は以下の通りである。

（2）学生による調査活動の成果

以下に質問項目に基づいて順次、回答内容を示す。まず、行政・外郭団体等調査に関して、質問１は「地旅として取り組んでいる分野」（以下の①）、質問２は「成功していると思う地旅、その成功の要因」（以下の②）、質問３は「地旅の展開における課題」（以下の③）である。さらに、民間事業者への調査も実施し、その結果もまとめた。民間事業者の調査協力者は、旅客運輸業と大手旅行社の４社であり、個々の事業内容の特性に応じた回答が得られた。質問1に「地旅について具体的に展開している内容」（以下の④）、質問２は「他の企業や行政・観光関連施設とタイアップ」（以下の⑤）質問３は「地旅を積極的に展開していく予定（計画）」（以下の⑥）に関しての回答を得た。

①　地旅として取り組んでいる分野

自然を活かした観光、ついで歴史文化の魅力を活かした環境が多く、約7割が実施している。製造業・建設業等に係る産業資源を活かした観光も5件見られる。その他、ガイド等の人材の育成を上げる所も2件見られる。

各回答に関する補足として、自然を活かした観光に関しては、富士山の恩

恵を受けていることを意識した観光対象が多いことをあげている。また歴史・文化の魅力を活かした観光については、ウズベキスタンの場合、シルクロードの中心地（砂漠を抜けた後のオアシスにあたる）ため、世界遺産が多い。有名なものはブルーモスク。フルーツがとてもおいしい。ワインの生産も盛んである。

国内では、京都は全部の分野、バランスよく取り組んでいる。神社・仏閣はもちろん、京料理も有名であること。

江戸時代から残っている黒江のまちなみで海南の伝統の体験を行っている。

また、式年遷宮で出雲大社は特に人気があった。ジオパークや石見神楽も有名である。

農林水産業に係る資源を活かした観光としては、淡路島の冬は水仙がきれいに咲く。食べ物については、夏はハモ、冬はフグが有名。「淡路島ヌードル」や「淡路島バーガー」など淡路島ブランドの食品を開発。また、淡路牛を気軽に食べてもらえるよう牛丼として提供している。

そして、九度山町は富有柿が有名であり、九度山ブランドは日本一である。また、真田幸村と歴史文化を融合させた観光も進めている。古い民家・古い路地と真田幸村の融合も行っている。

さらに、かつらぎ町は丹生都比売神社や串柿の里などがあり、柿の生産日本一である。様々な農作物が１年中とれる。

最後に、人材を活かした観光のためには、自分の住んでいる街がどれだけ素晴らしいか理解することによって、それぞれの個性を尊重するインターナショナルを生み出す。また、人。どのような観光資源があっても、優れた人がいないと客は来ない。人材育成に力をいれている。観光ガイドボランティアを30年前から続けている方が語ってくれた。

② 成功していると思う地旅、その成功の要因

成功しているともう地旅については、回答者自らのまちで成功していると思う地旅と、他の地域で成功していると思う地旅の双方の回答が見られた。これらのカテゴリーを整理すると、成功とした評価の切り口が「工夫の仕方」であるものと「地域資源の活かし方」の2つに分けられ、それぞれに多様な

成功の要因を上げている。

例えば、バスツアー促進策としては、堺観光コンベンション協会では、バスツアーの助成金を10名以上の団体で、3時間以上堺市内を周遊すること、民間貸切りバスを使用すること、堺市内の宿泊施設または飲食施設を利用することなどを条件とし、バス1台につき宿泊の場合は5万円・日帰りの場合は3万円を限度とし助成を行い、堺の魅力を広める活動を行っている。旅行のプランの作成のほとんどは旅行会社に任せている。旅行の内容は、仁徳天皇陵をはじめとする古墳めぐりツアーや、国宝に指定されている櫻井神社、自然ミュージアム「ハーベストの丘」などである。参加者は自治会・老人会などを中心とした高齢者が多い。

③　地旅の展開における課題

地旅の展開で課題になっていることについては、担い手、ついで経済効果が挙げられ、いずれも約75％程度となっている。また、その他として地域特有のアクセス等に関する課題も同様に75％程度となっている。

体験型観光については、「理想を持ってそれに近づいていくようにする。長いスパンで見ていく必要がある。」という回答を得ている。

まず、担い手に関する課題としては、産業の後継者不足をあげられる。例えば、熊野川舟下りの船頭を60～70歳の方が担っている。このように高齢化による後継者不足の顕在化をみている。また、自分の代で終わりという旅館も多い。

高齢化にかかわる問題はボランティアに関しても同様である。語り部の高齢化が目立つし、後継者がいない。そして、ボランティアは退職後の方が多く、若手がいない。ボランティアにとどまらず、正式に団体に所属し、後にリーダーとなる人もいない。ガイドも高齢化し、観光はガイドさんがいたほうが楽しいので、若手が欲しい。

人口流出・減少も著しい。県外就職率が高く、若者が町から出て行ってしまっている。人口減少による後継者不足。魅力のある町であると若者にアピールしてほしい。特に町外から若者が入ってきてほしい。

過疎状態である。高齢者のマンパワーを用いることで解決を図っている。

その際、遊びに近い形で楽しく働いてもらうことにしている。行政は、入りすぎても入らなさすぎてもいけない。住民に介入しすぎたら、行政主体になってしまうので、加減も必要となる。

紀ノ川市は高齢化が進んでいるので（２５％）、やはり担い手不足は課題である。後継者不足はもちろん課題である。

人口減少や高齢化により、後継者が不足している。また世界遺産の高野山という意識が薄れている。

観光の需要に対して、受け皿が小さいことが課題であるが、それはつまり人が足りないということ。そこで、人材育成をしている。若い人も年寄りも繰り返してトレーニングを受けている（静岡県）。

経済効果に関する課題としては、滞在型観光になっていないことがあげられた。観光客が滞在しない通過型観光地であるのは、温泉が無いからとの指摘。基本的に日帰りであるのは、宿泊してほしいがホテルは殆どないとのこと。さらに、神戸など周辺に宿泊客が流れているため、なかなか利益が生まれない。

このように受入環境が十分でない。100人以上入るホテルが三軒と、民宿が三軒しか存在しない。九度山町は経済効果が少ないため、お金が落ちる場所を作れないのが現状なのでお金の落ちる場所を作っていくのが課題であるという。

「ない」ことに対して必要な工夫･努力とは何か。まず、リピーターになってもらう必要がある。そのためには気を抜くことはできない。ふと安心して気が抜けることがあるかもしれないが、初心に帰るべきである。

くまモンで、何億もの経済効果と言われているが、実際は、熊本県に還元されていない。また、くまモンが他県に出ていくことが多くなってしまった。そこで、くまモンスクエアという熊本でくまモンに会える場所をつくった。

経済効果は今は少ないけれども、継続することによって克服できると思っている。どこでも生産できるものを、いかに他より秀でたものにするか。自分のやりたいこと、設けることのバランスを考えなければならない。

観光形態の変化への指摘もみられた。旅行形態が団体から個人へと変遷し

たことで、宿泊施設が対応できなくなった。宿泊施設の価格競争の問題もある。またバブル崩壊後の不況で会社の保養所が減少した。

他の地域諸活動との関わりへの課題の指摘もあった。例えば、基盤整備が不十分あり、交通の便が悪い。高速道路を通して欲しいという意見である。

アクセスが悪いことを念頭に、現在観光客が訪れるためによく使われているのがJRなので、JR各駅にポスターを貼ってもらっている。

地域住民同士の連携やエリア全体で広域連携の必要性、広域合併に伴い町の範囲が広がり、一部分の観光に止まっているとの指摘もあった。日本古来の良さを競合するのではなく他地域と連携する形にて示す必要がある。

その他の課題には、移動交通手段に関することがある。例えば、北海道を効率的に旅行するには車が必要となる。運転が可能な人はレンタカーで道内を移動することができるが、運転はできない人は公共交通機関に頼るしかなくなる。観光向けのバスの充実が課題である。

また、新幹線の通っている地域は観光客が来るが通っていない地域まで観光客が流れていないことや、島根県では東西に長い形の土地のため、各観光地が離れている。出雲大社からほかのエリアへ人の流れをどうやって作るかが課題である。

淡路島は橋を渡らないといけない（＝交通費がかかる）。また、島の中では電車は走っておらず、バスもあまり充実していない。ただし、観光客のほとんどがマイカーで来るため、今のところあまり影響はない。

公共交通機関がなく、交通の便が悪いところは便利ではないが、逆に自然が豊かな点を活かす。負としてとらえるのではなく、プラスに変える。

地域住民の認識に関してはどうであろうか。観光資源は豊富にあるのに、そこに住む人々が認識していないし、行動が起きてこないこともある。この点について住民の意識も重要となる。

地旅の展開において大事なのは、地元の人にどれだけ取り組んでいただけるかであると思う。地元の人の協力なしではできない。地域一体となって取り組む必要があるが、その一方で、それぞれ思惑もあり、全体でまとまるのは難しい。

ネットワーク形成については、串本町単体ではなく、和歌山県全体で連携して全国にPRすることができれば、更なる発展に繋がるのではないか。例えば、クエは一年中あるわけではないので、近隣の地域と広域的に協力してPRし観光圏域を形成することも必要。さらに自治体レベルでは、集客力が弱いく、規模も小さい。だからこそ旅行会社とコラボすることが必要である。

認知度・集客力向上も必要である。集客力に課題を感じ、都会から足を踏み入れてもらう方策を思案している。

その工夫の一環に、岡山県は全国でも認知度が低い（43位）ため、まずはその認知度を高めることが課題である。県知事が自らミュージカル風にしてアピールしている。

京都市には観光客が集まるので、府内の日本海側にも観光客が行くように工夫したい。

ウズベキスタンは名前が似ていることもあり、アフガニスタンと似たイメージを持たれてしまうことが克服課題である。実際は治安もよく、日本人やロシア人の観光客も増加している。日本からは成田空港から週２で直行便が出ている。まだまだ知名度が低いので、もっとみんなに知ってもらいたい。

外国人（東南アジア）向けに、例えば、wi-fi整備など、「おもてなし」のレベルの向上を目指す。

④　地旅について具体的に展開している内容

日本旅行やJR西日本では、普段見ることができないものや体験ができる商品をツアーとして扱っており、JR西日本では移動時も楽しませる商品を開発している。

JR西日本では、旅行会社とタイアップした魅力の創出と知名度のあるレジャー施設を組み合わせた商品を提供しており、大手旅行会社等のタイアップによる旅行商品開発が行われていることが分かる。

フェリーさんふらわあでは、船室を活用した地域特有のひな人形を展示するなど、船の活用方法を自治体に積極的にPRしている。しかし、民泊を導入したがニーズがなく実施していないということで、商品として売れるものでなければ、民間企業での継続した取り組みは難しいことがうかがえる。

具体例では、日本旅行にて、舞妓さんの衣装を着て街を歩く（京都）、時代劇の衣装を着て庭園を散歩する（山口県　長府）。工場見学では、スイーツの工房を見学。観光協会が地元の人をガイドに認定している。

フェリーさんふらわあでは、民泊を実施したことがあるが、ニーズが少なく、今は実施していない。杵築市や日田市の独自のひな人形を船室で展示し、市に興味を持ってもらう。また、その他として「学校や企業の合宿・研修。カリキュラムに入れてもらう」を上げている。

JR西日本は、普段見ることができないもの、移動も楽しめるようにする。JTBとのタイアップで、那智の滝の夜のライトアップを見学、白浜アドベンチャーワールドを回る。

⑤　他の企業や行政・観光関連施設とタイアップ

大手の日本旅行、JR西日本では、知名度の高いキャラクターの採用と、それらを採用している会社同士のタイアップにより、幅広い層をターゲットにした戦略的なPRを行っている。

また、フェリーさんふらわあでは、商圏の拡大を狙い、自治体や大学、遠方のバス会社などとのタイアップを行っている。

具体例としては、日本旅行は、宣伝方法の一つとしてキティちゃんを起用した結果、ポケットティッシュやパンフレットを受け取ってもらいやすくなった。また、フェリーさんふらわあは、商圏の拡大を狙う目的で、大分県の自治体、静岡県のバス会社、鹿児島県、宝塚市、阪南大学などとの連携を強めている。さらに、関西国際空港会社は空港がある泉南市の自治体とタイアップして空港を起点とした観光を確立するための方法を検討している。そして、JR西日本は、キティちゃんのデザインの電車、旅行会社とタイアップして観光客の幅を広げるとしている。

⑥　地旅を積極的に展開していく予定（計画）

4社中2社の回答を得ており、観光協会や観光施設、幅広い企業や自治体とのタイアップが望まれている。

日本旅行では、観光協会や観光施設と協力して積極的に展開していきたい。とのこと。また、フェリーさんふらわあでは、幅広い企業や自治体とタイ

アップしてマーケットの創造、商圏の拡大を狙う計画である。

以上紹介したように、調査に参加した学生たちは、海外の事例も含めて、観光という行動のもつ多様な側面とそれに関わる人々の様々な考えにふれることができたと考えられ、講義では得られない学習活動を行なえたと考えられる。

（3）観光立市をめざす御所市への貢献

前項で述べた学習成果を踏まえ、御所市での活動を行った。学生は地旅博の出店ブースでのヒアリング調査の体験から得た知見をもとに、御所市の土地の持つ自然、産業、暮らしを活かした着地型観光を提案することになった。本プロジェクトに参加した学生から､7件の提案が出された。それらを集約し、2014年3月2日に開催された､「御所市専門家モニターツアー」の際の座談会にて発表した。

ツアープランは次の通りである。（ⅰ）御所サンダルでゆく、ごせまち探索ツアー、（ⅱ）ツーリング、ドライブで巡る御所観光、（ⅲ）くすりの町～御所～お散歩ツアー、（ⅳ）葛城山滝とツツジを鑑賞するツアー、（ⅴ）御所を灯すライトアップイベント、（ⅵ）京都・大阪発着　もっと奈良・冬の御所（ごせ）探訪バスツアー、（ⅶ）御所歴史遺産巡り。

表題から判断すると、市域の自然環境や地場産業を素材として、移動交通手段を考慮したものになっている。以下にその概要を示しておく。

①　自然環境を切り口にしたプラン

このカテゴリーに該当するのは、上記（ⅳ）である。このツアーは、1）近年の山登りを趣味とする「山ガール」という若者が増加に着目している。市域にある葛城山は特別な装備を必要としない初心者向けの山だが、分かれ道が多く道が複雑だと感じる旅行者も少なくないと考えられ、地元の方々によるガイド付きの登山というツアーというものがあると気軽に参加しやすいのではないかと考えた。そこで、2）人数は少人数（４～５）を想定し、ガイド１人と観光客でロープウェイに乗れる人数以下であることが望ましい。さらに、3）住民による道案内の他、滝の名前の由来や歴史などもガイド内容に加えれば、より良いツアーになる。

② 地場産品を念頭においたプラン

（ⅰ）、（ⅲ）が該当する。まず（ⅰ）の特長は、1)「履きやすいサンダルor靴」と銘打ち、実際に観光客に履いてもらい、それで御所まちを探索する。ただし、靴擦れになる可能性大なので、短距離移動で観光する。もし、観光客が履物を気に入れば、購入可能にする。2) 7月の夏祭りにあわせて、浴衣と一緒に浴衣に合うサンダルをレンタルできれば、それを着用し、お祭りに参加してもらう。3) このツアーに、桐で作った下駄を代用してもよいと思う。その旅の思い出に、ミニ下駄作り体験を組み合わせると、さらに良くなる。

次に（ⅲ）は、1) 田村薬草園で、薬の原料や、大和野菜の菜園の様子が見学できる。なかなか自生する薬草を見る機会は無いので貴重である。2) 三光丸クスリの資料館では、三光丸の歴史だけではなく、大和の製薬の歴史も学ぶことができる。製丸の工程も理解できるため、見応えがある。3) 吉祥草寺には、今でも有名な薬である陀羅尼助丸を作った役行者の生誕の地であり、修行をしたところでもある。陀羅尼助はもちろん、役行者は南総里見発見伝に登場するなど有名であるため、吉祥草寺は魅力にあふれたスポットである。

③ 移動交通手段を意識したプラン

自家用車やバイクなど自前の交通手段を想定した（ⅱ）、そしてバスチャーター利用を念頭に考えた（ⅵ）がある。

まず（ⅱ）では、1) 御所にある名所のＰＲするため、道路地図でどのようにまわるのがよいかを分かりやすくする。そしてそれに基づき観光客に事前に予定を立ててもらっている方が多くのところに立ち寄ることができる。2) 立ち寄ったときにお金を使ってもらう工夫が必要で、特にツーリングで訪れる場合あまり大きなものは買えないため、飲食、入場料などでお金を使ってもらうのがよい。3) 休憩できる場所、駐車場の案内は必須のこととなる。駐車場があるかは立ち寄るときに重要なポイントとなる。そして、車、バイクから降りたときがお金を使ってもらうチャンスなので休憩できるところがあると効果的と思われる。

次に（ⅵ）は、1) かつて、霜月祭（御所の祭の１つ）に行く機会があり、その際にごせまちを案内していただいた。文化と歴史がつまった町家や道を

見て歩き、奈良の良さは県内の至る所にあるのだと実感したことがきっかけである。見所は、ごせまちだけにとどまらない。御所市の物産ガイド「御所の逸品」を見ると、名柄のまちなみも魅力。また、九品寺にも立ち寄りたいところである。白洲正子著の「かくれ里」の中でもとりあげられた千体石仏もそうだが、大和三山が一望できるという点が興味深い。

2）上述の「御所の逸品」より、食に関連した地場産業が多いとわかった。醤油やお酒は料理の調味料になるし、はるさめ、山の芋、野菜、米は一品に、吉野本葛はデザートにもなりうる。しかし、生産・販売場所は広域にわたるので、一日ですべて味わうのは難しい。それを可能とするかもしれないのが、お弁当である。地図を見ると、JR吉野口駅に柳屋さんという駅弁製造・販売をしているお店がある。そこに協力を依頼して、御所の素材を活かした“御所よくばり弁当”のようなものが出来ないだろうか。可能であれば、バスツアーの昼食にと考えている。

また、注目したいのは、「御所の逸品」に掲載されている北村牧場さんである。今回、冬のバスツアーということで、ツアーの後半に御所にある温泉に立ち寄り、暖まるツアーにしたい。そこで結び付いたのが、温泉と牛乳である。お風呂あがりに牛乳というのは定番だが、ホッとしていただけるのではないかと思う。

3）最後に旅の疲れを癒し、冷えをとって帰ってもらえればという思いから、日帰りのなかでもゆっくりできる温泉をツアーに入れた。温泉の候補地は２つである。１つは、地図にもよく載っている「かもきみの湯」である。駐車場があり、営業開始時間が早いので、時間の都合がつけやすいという点に注目している。もう１つは、あまり地図には載っていないが、「新産湯温泉」という御所小学校の東側に佇む温泉で、レトロな雰囲気を醸し出している。駐車場はあるが、営業時間は16時からと「かもきみの湯」よりは遅くなる。ちなみに参照したのは、（www5b.biglobe.ne.jpm）である。

④　夜間や宿泊も考慮したプラン

この範疇には（ｖ）、（vii）が含まれる。

まず、夜間の照明を活用したプランとして、（ｖ）がある。その内容は、1）

自然と融合させた光。桜をライトアップするなど夜間照明としての機能の光だけではなく、思わず見とれてしまい遊歩できるような空間の演出をし、ライトアップウォーキングイベントのようなものを行う。葛城山自然ツツジ園で、ツツジのライトアップも良いのではないかと思う。また、葛城山や金剛山の山頂で、冬の時期であれば雪と光を融合させた催しをする。

2）町家と融合させた光。『奈良・町家の芸術祭 HANARART』で行われているようなことを長期的に行い、御所まちを認識してもらう。注目されている町家空間は観光資源として成り立つと考える。地域住民の地元愛や協力関係を強めることができる。

3）神社仏閣と融合させた光。神社仏閣だけではなく、その周辺を光で演出し、幻想的な空間をつくり出し、周遊できるようにする。

最後に、宿泊旅行プランとして(vii）を示しておく。1）全国の「鴨（加茂）」神社の総本社である高鴨神社や、日本神話の高天彦神社など、御所にしかないものがある。そのオリジナル性を前面に出すことで、御所を深く印象付け、イメージされやすくなる。

2）400年前の街並みがそのまま残っているごせまちは、まるでタイムスリップしたかのような気分になる。京都の東映太秦映画村などの雰囲気とは異なる、本物の重みを感じることができる。

3）各神社はかなりの距離・高低差があるので、バスを使って移動することになる。この際地元の旅行業者やバス会社を利用することで、御所市のインバウンド増加に伴い地域経済のさらなる活性化が期待できる。

以上、ここまで示した学生たちによる提案は、整理・集約され、後日に御所市より発行された、「着地型観光の道しるべ」の作成にも活用された。

Ⅲ　都市における知（地）の拠点事業の意義

本学において、上述した取り組みを可能とした背景には、2001年4月に地域創造学部の開設以来、学生の地域社会との関わりを重視する教育を実践してきたことにある。その成果は、「地域貢献型キャンパス事業」における一連の取組を通して、県内外に広く知られているところである。そして、同年度より初年次教育の柱として実施されてきた「基礎ゼミ」も大学周辺、世界

遺産に登録をみている古都奈良を学びの場として活用し、教員それぞれが様々の手段・方法でその成果を世に問い、少なからず学内外からの評価を得ている。また、２年次生のみに履修対象者を絞り込んだ「地域現場実習」においては、その活動範囲を県全域のみならず、近県にも拡大し、学生の地域認識の陶冶と調査活動の取りまとめの能力の養成に一定の実績を積んでいる。

こうした成果を踏まえてわれわれは、2013年度より文部科学省の公募による「地（知）の拠点整備事業」の一環として、「地学連携と学習コモンズシステムによる地域人材の育成と地域再生」の事業に取組んでいる。この事業は、文部科学省の公募要領にも記されているように、大学教育改革と自治体（地域、都市）の再生や活性化とを連動させるものである。

現代の都市間競争にあって、都市としての諸機能の複合化とサービス集積の形成がその競争力を醸成することはほぼ一般化していると考えられる。そしてそこに大学が必要不可欠性の存在であることは国内外の事例を通じて明らかである。都市と大学とのかかわりは、基礎研究の場、技術者の養成、さらには社会人への高等教育機会の提供など様々な局面がある。ただし、都市の競争力を高めるということは、都市のサービス機能の質的強化に直接的に大学がかかわれるということだけでなく、広い意味でかつ様々な形での大学の地域貢献が想定されてこそ可能になると考えられる。

一方、大学が大学として持続的な存在であるためには、自治体や産業への貢献のみをもって足りるわけではない。実態としての大学の立地とそこにおける人的側面との関連性も見逃せない。本論においてこれまで具体的に述べてきた御所市と奈良県立大学との連携はまさにその観点からの事例として位置づけられる。自治体と大学、それぞれの組織を構成する住民、自治体職員、コンサルタント会社、大学教員、学生が相互に情報を出し合いながら、都市（地域）の課題を整理し、住民自らによる課題解決への取組みを援助しているのである。今回の「地（知）の拠点整備事業」はこれまでの本学の取組を整理する上で重要であると同時に、都市における大学の教育サービス機能を周辺地域で活用させる際にも重要な装置となると考えられる。

付記

本稿は2013年度文部科学省「地（知）の拠点整備事業」として採択された、「地学連携と学習コモンズシステムによる地域人材の育成と地域再生」事業の成果の一部である。

本稿作成にあたり、地学連携の貴重な機会を与えていただいた御所市企画開発部企画観光課の皆様に感謝申し上げたい。さらに、調査資料のとりまとめに際しては（株）総合計画機構・地域計画室長の今井まゆみさんにお世話になった。記して感謝申し上げる。

文献

加藤和暢（1988）:「地域活性化」戦略としての大学誘致－予備的考察－,『開発論集』（北海学園大学開発研究所）41：83-112.

国土庁大都市圏整備局編（1995）：大学立地と地域づくりを考える．大蔵省印刷局.

御所市企画開発部企画観光課（2011）：御所市第５次総合計画－自然と笑顔があふれる　誇れるまち－．御所市

小松原尚（2005）：大学に関する立地論的考察．奈良県立大学研究季報第16巻2号，13-22.

小松原尚（2007）:『地域からみる観光学』大学教育出版.

関口靖之（1997）：地形図にみるヨーロッパの都市と大学．『四條畷紀要』（大阪府立四條畷高等学校）６：33-48.

関口靖之（1998）：地形図にみる都市と大学－日本の学園前とイングランド・スイスの若干の事例－,『日本文化史研究』28：45-57.

下平尾勲（1995）:地域の発展と高等教育機関の意義について（一),『商学論集』（福島大学経済学会）63-3：13-47.

横尾壮英（1992）:『中世大学都市への旅』朝日新聞社.